

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第23集

高尾向山遺跡

(昭和63年度中東遠地区新設養護学校埋蔵文化財発掘調査報告書)

1990. 3

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
静岡県袋井市教育委員会

序

高尾向山遺跡は、袋井市の南地区、小笠沢川の左岸に位置する古墳群と集落跡からなる丘陵上の遺跡である。遺跡の西側には、明治時代の発掘によって六鈴鏡を出土した高尾閉子塚古墳群が、また東側には昭和45年の発掘調査で馬具をはじめ多数の遺物を出土した雲座古墳群が連なっている。

この度の発掘調査は県立養護学校建設に伴う事前調査であったが、成果として高尾向山遺跡の一部である丘陵上より、古墳2、住居跡1、などの遺構が検出され、袋井市南地区の古墳群解明の大きな手掛りをつかむことができた。また遺物の中にも、鹿角装刀子をはじめ須恵器・土師器・鉄鏃など古墳時代の文化を考える上で貴重な出土品を得ることができた。最近の袋井市南地区の発掘調査では、愛野向山古墳群、石作古墳群などの群集墳全体の調査や集落跡、須恵器・埴輪窯跡などの生産跡の調査も多くなってきている。これらの調査結果から南地区の古墳の初現は、高尾向山遺跡の古墳と同じく、5世紀末～6世紀前半となっている。その結果、袋井地域での古代豪族の活動と、中央政権との接触について総合的な検討が必要となってきたことは今後の大きな課題であろう。

なお、この調査に深い理解と協力をいただいた静岡県教育委員会財務課の方々に感謝するとともに多忙の中現地調査を担当して下さった袋井市教育委員会の方々のご協力にも厚くお礼を申し上げたい。終わりに、冷たい西風“遠州のからっ風”が吹き付ける中、遮るものもない山頂の発掘調査に従事した地元袋井市の作業員、資料整理員の皆さんの労苦に対し感謝したい。

平成2年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 齋藤 忠

例 言

1. 本書は昭和63年9月1日～平成元年3月31日に、袋井市高尾2753-3外で実施した「昭和63年度中東遠地区新施養護学校埋蔵文化財発掘調査業務」の高尾向山遺跡発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、静岡県知事を委託者として、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所理事長と袋井市長を受託者とし、袋井市教育委員会を調査主体として実施した。
3. 現地の発掘調査は永井義博（袋井市教育委員会主任学芸員）が担当した。また、本報告書の執筆・編集も永井義博が行った。
4. 本調査に係わる経理は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所総務部が担当した。
5. 袋井市教育委員会での事務は社会教育課が担当した。
6. 出土遺物・調査資料は、すべて袋井市教育委員会にて保管している。



▲ 高尾向山遺跡の位置（1：50,000）

第1章 発掘調査に至る経過

高尾向山遺跡は、昭和54年作成の「静岡県遺跡地図・地名表」には登録されていないまったくの新発見の遺跡である。当初、養護学校の計画が持ち上がったころは当然この丘陵上に遺跡の存在することは判らなかった。

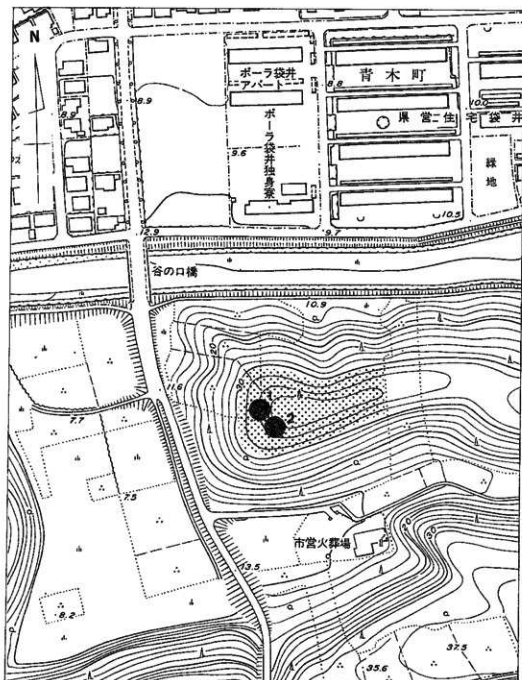
さて、現地の埋蔵文化財の所在確認の依頼を受けた袋井市教育委員会は吉岡伸夫を現地に向かわせた。結果として古墳が1基（後の高尾向山2号墳）あることが確認され、ついで、現地の状況の把握にみえた財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の平野吾郎氏によってもう1基（後の高尾向山1号墳）が確認され都合2基の古墳となった。

当初、静岡県教育委員会財務課より示された計画では昭和63年10月より造成工事を実施したいので、9月中に発掘調査を行って欲しいとのことであった。本来、養護学校の建設は県営事業であるので静岡県教育委員会文化課に対応していただくのが本筋であるが、文化課は調査に対応できないので受益者である袋井市で調査をして欲しいとのことであった。しかし、袋井市はすでに多くの発掘調査を抱えており、また9月議会もすでに開会されて補正で予算措置をとることができない等、とてもこの時期に新規事業に対応できる状態ではなかった。そこで、関係者によって静岡県から財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所に委託して実施していただく方法、また調査員を学校教員から派遣する方法など検討された。しかし、最終的には四者協議の上、静岡県より財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所に経理のみ委託し、現地発掘調査については袋井市教育委員会を受託する、かなり特殊な委託の形となった。

さて、9月1日付けで三者による委託契約が成立し、袋井市教育委員会は発掘調査の準備を完了して待機していたが、いつまでたっても発掘調査にはとりかかれなかった。そして秋が過ぎて、実際に土地の買収が完了して調査を開始できたのは11月も半ばで、強い西風の吹き始める頃であった。



▲ 発掘調査前の1号墳（南から）



▲ 発掘調査位置図 (1 : 2,500)

第2章 調査経過

- ◎9月1日 委託契約開始日。現地はなんと土地買収が完了していない。
- ◎11月7日 よやく発掘開始。重機により表土剥ぎ・抜根を開始する。
- ◎11月8日～ 高尾向山1号墳・2号墳の発掘調査。強い西風。とても寒い。
- ◎12月9日～ ビット群および近世上墳の発掘。器材や遺物が次々吹き飛ぶ。
- ◎12月12日 調査区全体写真撮影の為の清掃。撮影。その後、住居跡の調査。
- ◎1月4日～3月30日 一部出土品の整理作業。
- ◎3月31日 委託事業完了日。



▲ 高尾向山遺跡の発掘調査風景（東より）

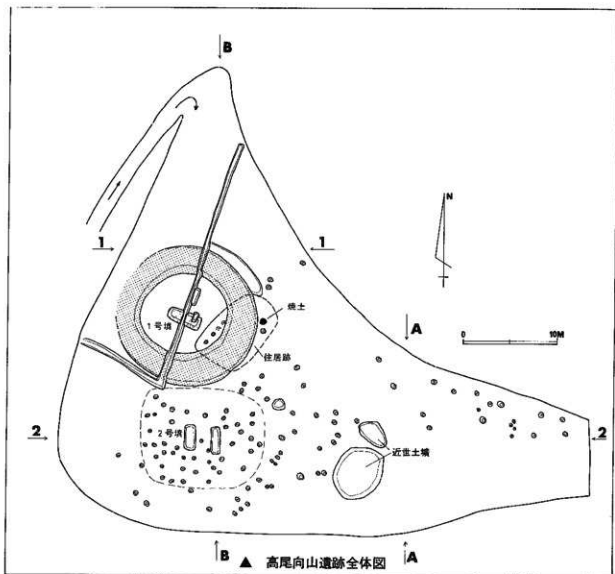
第3章 調査体制

- 調査計画 静岡県（静岡県教育委員会）
- 調査主体 袋井市教育委員会

| | |
|--------|----------------|
| 教 育 長 | 浅 井 通 男 |
| 社会教育課長 | 岩 崎 保 |
| 文化振興係長 | 小 粥 保 夫 |
| 主任学芸員 | 吉 岡 伸 夫 |
| 主任学芸員 | 永 井 義 博（調査担当者） |
| 主 事 | 建 部 千 代 子 |
| 学 芸 員 | 松 井 一 明 |

第4章 調査方法

高尾向山遺跡の発掘調査は、開発計画用の五百分の一の測量図を基本として実施した。基本グリッドも求積図作成用の測量ラインを援用して、調査地内に設定された20mグリッドを使用した。ベンチマークもこの時、丘陵上に運び上げたものを使用している。現地の実測図作成は20分の1を基本に、古墳主体部などは10分の1の図で対応した。表土の除去作業は、2基の古墳はもちろん作業員の手により実施したが、その他の部分については重機を入れて抜根作業、表土除去作業をおこなった。古墳の墳丘上の根は1tのチェーンブロックで引きながら作業員の手によって1本ずつ抜根した。丘陵の先端で強い西風を遮るものがなく、石笥や一輪車まで吹き飛ば最悪の調査状況であった。

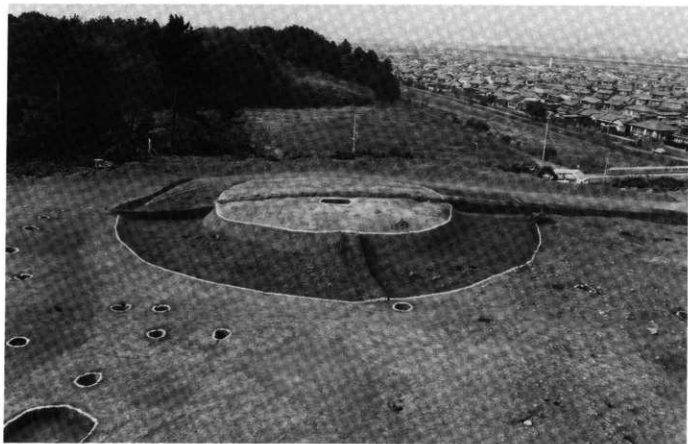


第5章 遺跡の概要

高尾向山遺跡の中心は、2基の古墳、住居跡（古墳時代前半）、近世土墳、多数のPitから構成されている丘陵上の遺跡である。丘陵先端に位置する2基の新旧関係は、南側に位置する高尾向山2号墳が、北の丘陵先端に位置する高尾向山1号墳に先行して築造されている。これは、1号墳の周溝が2号墳の隅丸長方形のマウンドを削っているのが確認されたためである。住居跡（古墳時代前半）は、1号墳の墳丘下に位置し、1号墳の周溝で遺構のほとんどを破壊されている。西側の立ち上がりで2つの柱穴、炉跡と思われる焼土が確認されている。これは2号墳築造時ごろの住居跡と思われる。

（高尾向山1号墳）

丘陵先端の北側に位置する直径約10m、高さ約0.8mの小円墳である。墳丘は丘陵上を平坦に整地して、その後盛り上りして築造されたもので、周囲には幅約3.2m、深さ約0.5mの周溝が急な斜面で土砂の流れてしまった西側を除いて巡っている。周溝の覆土は、しまりのない黒褐色土で、遺構の検出は比較的容易であった。2号墳の中央部には、丘陵西側斜面に広がる茶園の排水用の溝が南北に深く掘られて、墳丘は真つ二つに切断された状況となっており、まるで間違って設定された試掘トレンチのような形になっている。この排水溝の掘削は山の水を茶園に入れなためと、木の根を断ち切るためである。このように古墳の西側は茶園として開墾され、東側は山林として荒れるにまかされていたのが現状であった。このため、もちろん古墳の主体部も中央で切断されてしまっている。さらに、

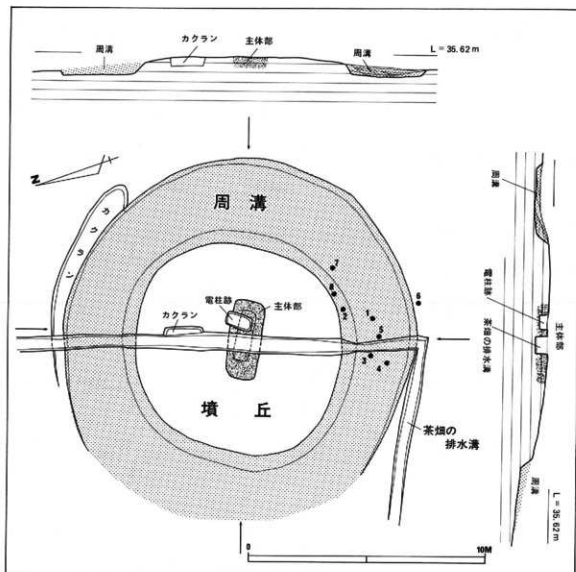


▲ 高尾向山1号墳全景（東より）

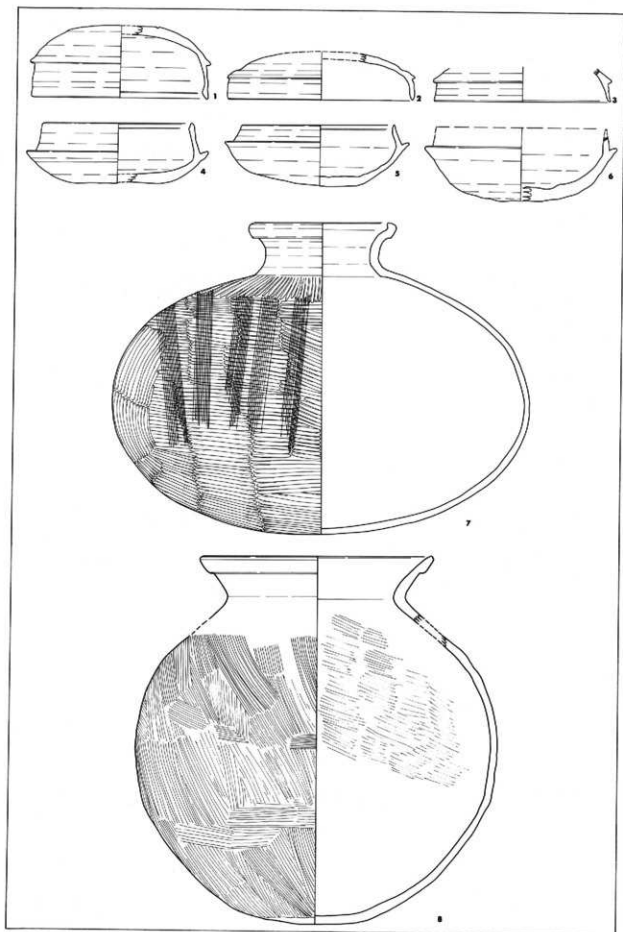


▲ 高尾向山1号墳東側周溝土層堆積状況

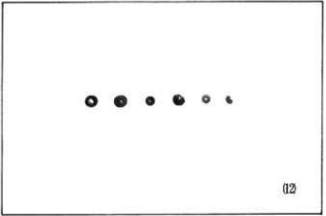
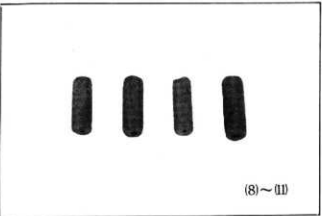
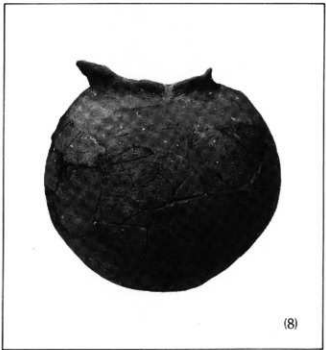
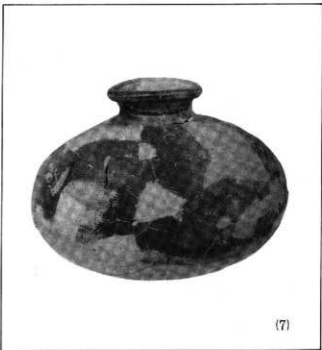
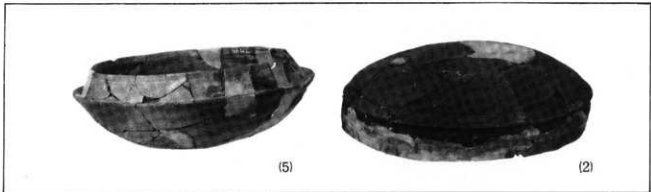
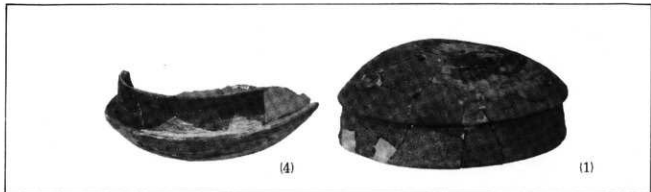
墳丘上には昔、袋井から浅羽町方面に送電していた電柱の大きな抜き取り跡が残り、古墳主体部にまで到達している。この傷だらけの主体部は墳丘のほぼ中央に位置し、主軸を西北西にとり木棺直葬である。木棺の痕跡は長軸 2.25 m、短軸 0.7 m、深さ 0.3 m で両小口には白色粘土を詰めてある。主体部からの土器類の出土はなく、主な遺物は鹿角装刀子？ 1点、直刀 1点、鉄鎌 4点、(平根式 1点、尖根式 3点)、不明鉄製品(鎌状) 1点、鉄破片(直刀の破片と思われる。)数点、管玉 4点、ガラス小玉 12点、が出土している。しかし、さきほど述べたとおり主体部は茶園の排水溝と電柱の柱跡により大きく攪乱を受けているため多数の遺物が散逸しているものと思われる。出土した鹿角装刀子？や直刀も茶園の排水溝で半分以上を切断されている。また、玉類の集中して出土した部分が電柱抜き取り跡に接しているなど不運な検出状況であった。出土遺物のうち土器は、古墳南側の周溝内に集中して出土している。ほとんどの遺物が周溝底部直上で出土し、墳丘より流れ込んだ痕跡がないため土器の集中して出土した地点で、埋葬に係わる祭祀が行われたのかもしれない。土器の壺は 1号墳の墳丘内よりの出土で住居跡に伴う可能性もある。



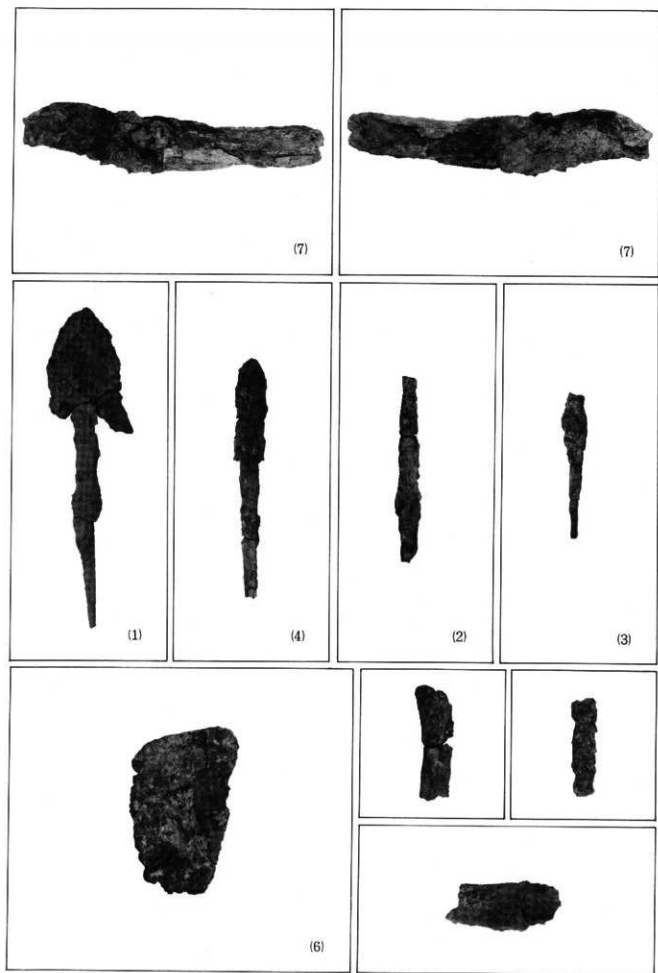
▲ 高尾向山 1号墳実測図



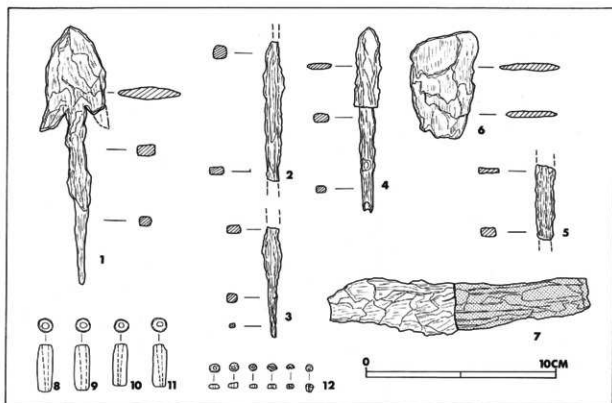
▲ 高尾向山1号墳周溝出土遺物実測図(1:3)



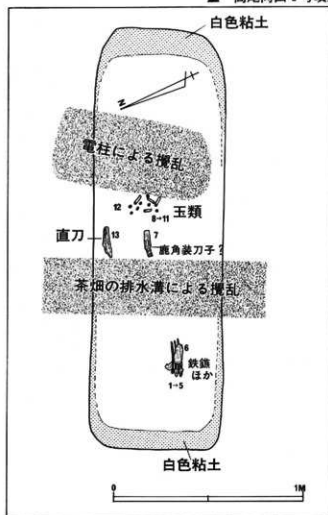
▲ 高尾向山 I 号墳出土遺物写真 (1)



▲ 高尾向山1号墳出土遺物写真(2)



▲ 高尾向山1号墳主体部出土遺物実測図



▲ 高尾向山1号墳主体部遺物出土状況

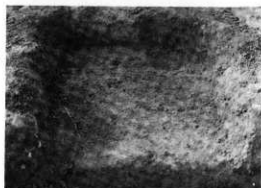
高尾向山1号墳の出土遺物は、古墳主体部から出土したものと、古墳の周溝から出土したものに分けられる。古墳主体部からは金属製品・玉類が出土したが土器類は見られず、古墳周溝からは須恵器・土師器の土器類が出土している。

1号墳周溝出土遺物は、1～3は須恵器坏蓋、4～6は須恵器坏身、7は須恵器横瓶、8は土師器壺である。1は口径13.8cm、器高5.7cm、2は口径14.5cm、器高3.8cm、3は口径14cm、器高は不明、4は口径11.5cm、器高4.8cm、5は口径11.8cm、器高4.8cm、6は口径・器高とも不明である。7は口径10.8cm、器高25.3cm、8は口径17.8cm、器高29.2cmを測る。

周溝出土の遺物は、6ページの高尾向山1号墳の実測図に示したとおり、古墳の南側周溝内より出土している。須恵器横瓶の出土状況が示すとおり、溝の底部にていね

いに置かれた状態で出土している。その他の須恵器坏蓋・坏身も溝底部より出土していることから、この周辺で1号墳の埋葬に係わる祭祀が行われた可能性がある。出土須恵器の年代は静岡県西部地方で一般的に用いられている遠江考古学研究会年編（1966 遠考研、1968 山村宏他）のⅡ期にあたり、田辺編年のMT15で6世紀前葉の年代に比定される。1・4の須恵器の坏蓋、坏身のセットは湖西産と思われる。

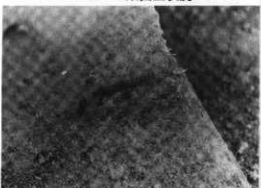
1号墳の主体部は、木棺直葬の主体部で両方の小口部分に白色粘土を詰めている。また、この主体部は2つの大きな攪乱によって中心部をズタズタに破壊され、多くの出土品を失っていると思われる。主体部からの出土遺物としては、金属製品と玉類の大きく二つに分類される。金属製品は、鹿角装刀子？の破片1点、直刀の破片一括、鉄鏃4点（平根式1、尖根式3）、鎌状鉄製品1点、などがある。金属製品は、すべて財団法人 元興寺文化財研究所に委託して保存処理をおこなった。玉類はグリーンタフ製の管玉4点、ガラス小玉6点がある。管玉は全長約2.50cm、直径約8cmで材質は悪く、長年の埋納のためボロボロになっている。中心部の穴は片側から尖孔されている。ガラス玉の色調は、コバルト・ブルーのものとライト・ブルーのものが比較的良好である。大きさは、4～5mm程度で中心部の穴は約1mmである。鹿角装刀子？と直刀の出土状況は、10ページの位置図のとおり埋葬主体部のほぼ中央部に主軸に沿って置かれていたが、茶畑の排水溝による破壊によって残念ながら半分以上を欠損してしまった。直刀の破片の状態もたいへん悪く錆が崩れかかっていた。しかし、鹿角装刀子は比較的良好な保存状態で鹿角部分もはっきり確認された。玉類は鹿角装刀子と直刀の東側で、埋葬者の胸あたりに散らばっていた。しかし管玉・ガラス小玉とも、電柱による破壊によって主要部分を大きく失っている。さらに、今回の発掘調査当初は、管玉6点ガラス小玉12点の出土数であったが遺物の出土状態の写真撮影中に遠州地方特有の“遠州のからっ風”と呼ばれる冬の強い西風による突風にあい管玉2点、ガラス小玉6点を失ってしまい、最終的には今回の報告の数しか紹介できない。この時は、写真撮影のために防護用のシートをあげたわずかな瞬間の出来事であった。発掘調査が当初の計画どおりの時期に行われていればと、たいへん残念であった。鉄鏃と鎌状鉄製品は、主体部西側にまとまって発掘された。数本単位でまとめられた鉄鏃の上に鎌状の鉄製品が乗る状態であった。残存状況はきわめて悪く錆化で脆くなっていた。



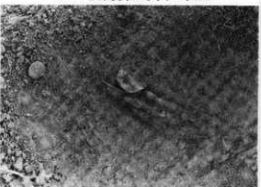
▲ 1号墳主体部西側



▲ 玉類出土状況



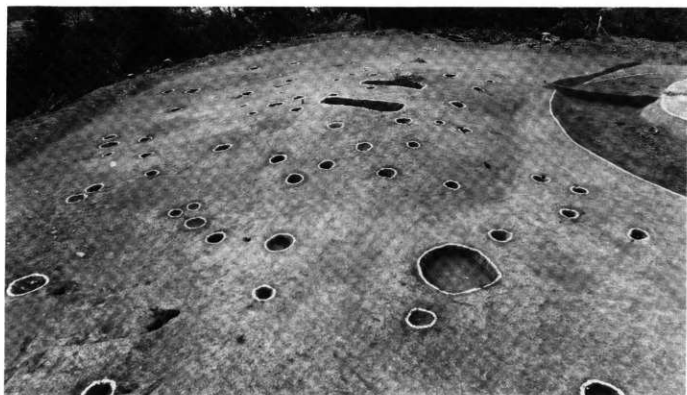
▲ 鹿角装刀子出土状況



▲ 鉄鏃出土状況



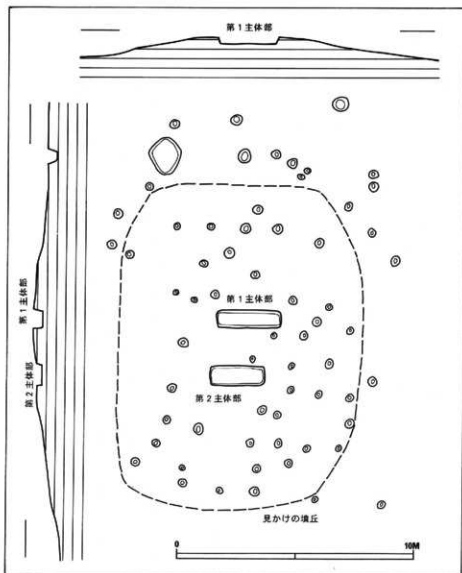
▲ 直刀出土状況



▲ 高尾向山2号墳全景写真(東より)

(2) 高尾向山2号墳

高尾向山2号墳は、丘陵先端の南端に位置する。墳丘は自然の地形を利用した地山を削り出しのマウンドで隅丸長方形の形態である。規模は、東西約13.6m、南北約10m、高さ0.95mで、いわゆる墳丘墓に近い形態を示している。墳丘北側の1号墳の築造にあたりその周溝により削り取られて一部その形を変えている。主体部と考えられる長方形の土壌が主軸を北にして2つ並行に検出された。東側主体部(第1主体部)東西約0.80m、南北約2.80m、深さ約0.40mを測る。西側主体部(第2主体部)は東西0.80m、南北2.40m、深さ

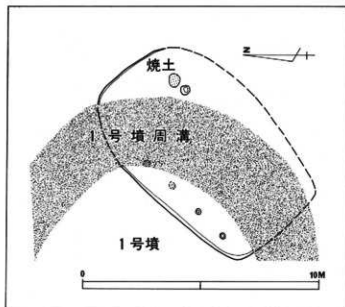


▲ 高尾向山2号墳実測図

約 0.40 m である。この古墳は、地山削り出しで周溝は持たない。主体部からは土師器破片が確認されたのみである。1号墳の特色としては、墳丘付近に集中する Pit 群である。これは、直径 20cm～60cm、深さ 20cm～50cm の小 Pit であるが、2号墳と同一時期の遺構群か、または時期的に下るものなのか遺物を伴わないので確認できなかった。

(古墳時代前期の住居跡)

この住居跡は、1号墳の墳丘下より検出された。遺構のほとんどは1号墳の周溝によって破壊されている。規模は、長軸 9.50m、短軸 6.40m、確認面よりの壁の高さは 20cm を測る。遺構内には3ヶ



▲ 住居跡実測図

所の Pit と、炉跡と考えられる焼土の分布が確認された。住居の形態はいわゆる小判形である。

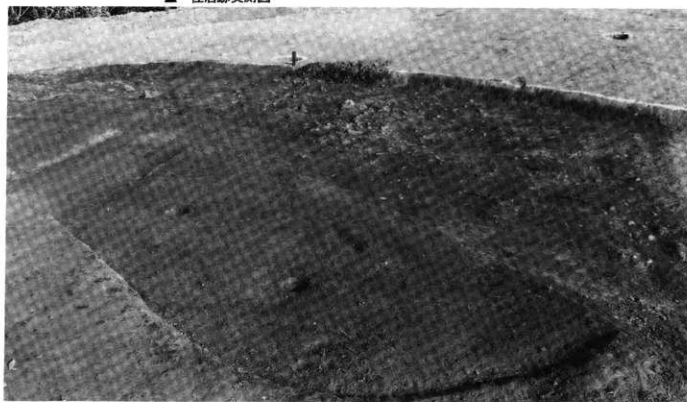
(近世の土壌跡)

2基の古墳の東側に大小2つの土壌跡が検出された。ともに不定形な土壌である。

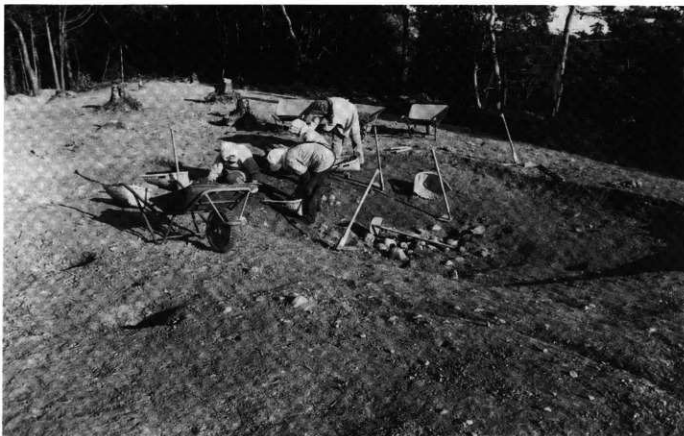
(Pit 群)

丘陵上には、多数の Pit が散在しており丘陵上の位置により次のような特色を示している。

(1) 1号墳の墳丘及びその周溝内より Pit は確認されていない。周溝東側に若干検



▲ 住居跡全景写真 (西より)



▲ 近世土壇発掘調査状況

出されているが特に規則性をもつようなことはない。これは古墳下の住居跡に関連するものであろうか。

- (2) 2号墳の墳丘には、この遺構との関連性はまったく不明であるが多数のPitが検出されている。2号墳に関連するものならば2つの主体部を二重に取り囲む柵列状のもの想定できるかもしれない。
- (3) 調査区の東側では、丘陵の北側斜面のみでPitが検出され、南側斜面からは発見されていない。この点については、さらに東側の地域の調査結果を待ちたい。

第6章 まとめにかえて

さて、前方後円墳を盟主墳とする高尾向山古墳群の、いちばん西側に位置する2基の円墳の調査は少ない予算、短い期間、そして静岡県西部地区で発掘調査を行う最悪の季節という三重苦の中、かろうじて埋蔵文化財の記録を取ることができた。

今回の高尾向山遺跡の発掘調査と前後して、袋井市内では愛野向山古墳群、若作古墳群の調査が実施され、原野谷川左岸の代表的古墳群の全容が解明されようとしている。さらに、現在、浅羽町との境界で高尾団子塚古墳群（袋井市内に15基以上）の発掘調査が進行中である。これらは、昭和末期からの日本の好景気を反映して、次々と大企業が設備投資をおこない、さらに生産効率を上げる世界戦略にでたためである。また、リゾート開発による各施設の建設や、大規模な宅地造成が目白押しで、袋井市を候補地とした理由の第一を地価の安さと広大な未開発地としている。袋井市内の主な古墳群がすべて消滅するのは時間の問題であろう。

高尾向山1号墳については、築造時期を出土遺物より6世紀の前半とみて良いと思われる。マウンドの築造方法は、ほぼ平坦な古墳時代の丘陵状の平坦面に直径約12mほどの円形の規格を取り、その外側を周溝とした。周溝を掘った土を2層以上(約50cmほどか)に盛り上げてマウンドとしている。さて、主体部を設定する場所では、1層目を盛り上げる前にまず主体部の位置に掘り方を一回り大きく作る。この段階で埋葬に係わるなんらかの行為が行われたのかもしれないが痕跡は残っていない。さて、さきほどの周溝を掘った土でマウンドの1層目を“おわん形”に積み上げていくが、その時、主体部の掘り方は積み上げた土で一度埋め戻してしまう。その後、マウンド中央にさきほどの掘り方よりやや小さめな土壇(これが主体部)を掘る。この中に、木棺を設置して、両小口部分に精選された白色粘土を詰めていく。そして、被葬者を埋葬して、その上に2層目を盛り上げて築造を完了する。そして、南側周溝で埋葬に係わる祭祀を行い、その時使用した土器類をそのまま周溝内に放置したと考えられる。使用した須恵器については、一部の土器が湖西産の可能性を持つ。年代的にはいわゆる遠考研編年のⅡ期にあたり6世紀の前半の年代が与えられる。この時期、袋井市の南の衛門坂窯が操業を開始しているが、その製品は見られない。主体部の遺物も、ほぼその時期と考えても大過ないと思われる。

高尾向山2号墳については、1号墳に先行して築造されたことは、周溝と2号墳のマウンドとの切り合い関係から明白である。主体部等からの出土遺物で時期を決定できるものがないので、はっきりしたことは判らないが、5世紀末～6世紀初頭と考えている。2つ並んだ主体部から、被葬者が同時に埋葬されたものなのか、また時期が前後するものなのかは不明である。若干の土師器の小破片はあるが時期決定までいかないのが残念である。マウンドの築造は地山の削り出しによって行われ、埋葬完了後は若干の盛り土を行っていると考えられる。また、マウンド上のPit群については、はたして2号墳に関連をもつかは、現在のところまったく不明である。2号墳の見かけの墳丘の東側部分の外側の様子から別の遺構(掘立柱建物群等)の可能性も十分に残っている。

住居跡については、2号墳の築造時期とほぼ同じ時期の遺構と考えているが積極的に年代を決定する資料は持たない。柱穴、炉跡と考えられる焼上など検出されているが、柱穴の大きさ等から長期間に渡って使用されたものとは考えられない。2号墳築造に関連するものなのか、埋葬儀礼に関連するものなのか、または古墳と関係なく見張り場または狼煙場的な性格をもつ遺構かもしれない。周辺の調査例の増加を持ちたい。

以上のように緊急調査としては、数々の成果を上げた発掘調査であったが、この範囲はあくまでも高尾向山遺跡・高尾向山古墳群の一部にしかすぎないのである。そのため、以前にも増して疑問点が残ったことも確かである。しかし、幸か不幸かこの周辺での開発計画は目白押しである。数々の疑問点については現在調査中の“高尾団子塚古墳群”や近日中に調査の可能性のある“高尾向山古墳群”の前方後円墳を含む残りの地区などの発掘調査の結果を待って再考していきたい。そして今回の養護学校に関連する発掘調査が、「袋井市南部古墳群」全滅への鎮欠となってしまったことも忘れてはいけない事実である。

最後になりましたが、発掘調査にご理解をいただいた静岡県教育委員会財務課の皆さん、経理面でご協力をいただいた財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所総務部の皆さん、その他各方面でご支援をいただいたみなさんに感謝いたします。

(袋井市教育委員会 永井義博)

静岡県埋蔵文化財調査
研究所調査報告 第23集

高尾向山遺跡

(昭和63年度中東遠地区新設養護学校
埋蔵文化財発掘調査報告書)

平成2年3月31日

編集 静岡県袋井市教育委員会 ©
袋井市新屋一丁目1番地の1
TEL 0538 (43) 2111

発行 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷 ㈲デザインオフィスエム・エス・シー
袋井市久能1977の7
TEL 0538 (42) 3164